

平成 20 年度 博 士 課 程 学 位 論 文 要 旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

「作業遂行プロセスモデルを用いた就労支援 87 脳損傷事例における
遂行機能障害と機能障害、活動制限、参加制約、環境因子の分析」

学位の種類： 博士（保健科学）

保健科学研究科 保健科学専攻 障害予防・機能回復科学分野

学籍番号：046210

氏 名：山内 寿恵

（指導教員名：渡邊 修 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

【研究の目的】

就労の成否に影響する遂行機能障害が環境の影響を強く受ける点に注目し、自己と環境の認知の障害が環境や状況に適応しつつ課題遂行することを困難にし、また注意や記憶などの障害や環境因子も影響を及ぼしていると考えた。本研究の目的は遂行機能障害に関する機能障害などを明らかにし、その支援を検討し、就労支援に貢献することである。

【計画】

グラウンデッドセオリーアプローチを採用し、データ同士を比較しカテゴリーを生成し、中心概念とカテゴリーの関係を分析し、新たな概念を得た。事例から国際生活機能分類の心身機能、身体構造、活動と参加、環境因子の詳細分類の定義に合致する内容を抽出し、データとした。帰無仮説 H_0 「機能障害、活動制限、参加制約、環境因子「A」が遂行機能障害に独立して起こる時、遂行機能障害を持つ群と持たない群で「A」事例数の割合に差異は無い」とし、両群の「A」事例数の比率等質性を χ^2 検定し有意水準 $\alpha = 0.05$ 、有意確率 $p \leq \alpha$ で H_0 を棄却し「A」は遂行機能障害に関係するとした。さらに「A」に関係する機能障害などを同様に検定し、遂行機能障害に関係する第 1 カテゴリー、以下、同様にカテゴリーを生成した。次に問題特定、モデルの選択、作業遂行要素、環境条件、利点、資源の明確化、計画、実行、評価の 7 段階を辿る作業遂行プロセスモデルを中心概念に分析した。

【結果と考察】

第 1 カテゴリーは注意、洞察、判断の障害と社会的距離の維持の制限、環境や業務の調整などの支援であった。第 2 カテゴリー以下は記憶、自己の経験、問題解決、自己中心的思考、組織化と計画、衝動の制御、時間管理、協調性、情動、抽象化、見当識の障害、及び社会的距離の維持、話し言葉の受容、複雑な対人関係、ストレス対処、作業耐久性、日課遂行の制限、及び職場や家族の否定的態度であった。多くが認知の柔軟性の障害に関係し、認知を助け考えや行動の柔軟な転換を促す支援が有効と考えた。また家族や職場の態度が情動の障害を介し洞察の障害に関係し、自己有能感、意欲を高め、不適切な情動反応を避けるため、家族と職場の態度が重要と考えた。また注意と記憶の障害が関係した。

遂行の全般に判断、洞察、記憶、認知の柔軟性、自己中心的思考、協調性の障害、話し言葉の受容の制限、家族や職場の態度が関係し、常に配慮する必要がある一方、注意、組織化と計画、問題解決、自己の経験、見当識、時間管理、情動、衝動の制御、抽象化の障害、及び社会的距離の維持、複雑な対人関係、日課遂行、作業耐久性、ストレス対処の制限は、遂行プロセスの特定の段階で関係を示し、その段階での支援が有効と考えた。